

万葉語「しなふ」とその周辺

水野, 清

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

12

(発行年 / Year)

1967-03-23

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019178>

万葉語「しなふ」とその周辺

水野清

万葉集に「しなふ」という語がある。たとえば卷三291 小田事の勢能山一首、

真木葉乃之奈布勢能山 之奴波受而 吾超去者 木葉知家武

(まきの葉のしなふ勢の山しのはずて、わが越えゆけば「岩波大系本越えぬるは」木の葉知りけむ)

これについて代匠記・卷一(契沖全集本624p)は言う(引用文の濁点・返点・送りがな)内などの付加は筆者)。

此まきは只木をいふべし。また披(スギ)の葉はしなやかなる物なれば、別名にもあるべし。しなふはしだる(枝垂る)心なり。

文選、司馬長卿・上林賦曰、垂条扶疏。

張平子・南京賦曰、敷華藥之蓑々(サイサイたるを敷く)

又云、望翠華、兮葳蕤(キズキたるを望み)

天台山賦曰、琪樹璀璨而垂珠(サイサンとして)

丘希範・且発漁浦潭詩、藤垂島易陟(藤しなひて島のぼりやすし)

神代紀上云、其秋垂頰、八握莫々然、甚快也(その秋の垂り

穂、八つか穂にしなひて、はなはだこころよし)

この集第十三に「春山のしなひさかえて」ともよめり。(中略)

しのばぬとは、故郷を恋ふる心にかえ堪へ忍ばで越え行けば、木の葉もわが心を知りけるにや、うなだるるやうに打ちしだりて見ゆるとなり。屋船句々廻馳命(ヤフネククノチノミコト)

「記伝は木ノ霊也とする」も座せば、もの知る理り有るべし。

契沖が文選や神代紀を引いたのは「扶疏」「蓑々」「葳蕤」「璀璨」などの語句が、古く「シナフ」と訓読されていること(「和訓栞」参照)を、「しなふ」枝垂る」説の傍証としたのであった。これらを諸橋「漢和大辞典」上田「大字典」などについて、その意味をしらべてみる。(とくに断わらぬものは、諸橋氏。「は上田氏) 扶疏」木の枝四方にひろがるさま「爾雅釈木注」言亦扶疏茂盛。 大字典「分布のさま、枝葉の盛んなさま」

蓑々」草木の葉の茂るさま「集韻」草木葉盛貌。「花の下垂せるさま」。(緑葉之妻々の対句、妻々は草の盛んなるさま)

葳蕤」①草木の花の盛んに垂れ下るさま ②盛んなるさま。

璀璨」①珠の光るさま ②珠の垂れるさま。

藤垂は日本の藤ではなく、海辺の蔓延性の植物の枝が繁っているさま（牧野富太郎説）。

莫々然モクモク草木のこまやかに茂っているさま。日本書紀通釈によれば「口訣に茂貌とあり、新古今集・大嘗会稲舂歌、神代より今日のためとや八束穂（ヤツカホ）に長田の稲はしなひ初めけむ」。この語は詩経・周南・葛覃の章にあり、中国詩人選集「詩経」は「葛の覃（の）びゆくや、谷の中へと施（うつ）りゆき、維（まこと）に葉は莫々（くるくる）」と訳し、その前の句の「萋々」（ふさふさ）よりも更に茂った状態と説く。また、この語は「少女の体の成熟せるさまの比喩」と言う。「漢詩大系・詩経上」でも「葉が成熟して十分に茂密していること、萋々よりも更に蔚然としているさま。莫は暮に通じ、うす黒く見えること」とある。

「莫々」には、①草木の濃やかに茂っているさま、のほかに ②延長して茂盛する ③衆多のさま ④清静で至敬なさま ⑤塵埃の盛んに起こるさま ⑥成就のさま（詩、周南、葛覃、伝。体の成熟という上述の比喩に当たる）⑦施すさま（詩経、大雅、旱麓に「莫々たる萋萋（つたかづら）施于条枚（枝幹にはいまとう）」、中国古典文学全集の訳の義がある。④の例として詩経、小雅、楚茨「君婦、莫々として、豆（トウ、料理をもる器）をつくるはなはだおほし」を引く。一家の主婦の、もの言わず、静かにつつしんで調理に専念するさま、莫、読んで貌となす、貌は静也、不言のさま。

書紀・文選の訓よみから考えると、「しなふ」は、①垂れるさま ②茂り盛えるさま ③ものの盛んなさま ④人の成熟したさま ⑤人のもの静かにつつしんでいるさま、となる。

これらの訓がいつごろのものかはハッキリしないが、「国語と国

文学」昭26・11「文選読考」（築島裕氏）では、いわゆる文選読みの最古のものを平安朝初期とし、知恩院蔵「大唐三藏玄奘法師表啓」平安初期朱訓点には「鳳篆亀文、既に東觀に葳蕤ケイスイの用例あることが報せられており、神田喜一郎氏「日本書記古訓攷証」にも書紀の訓読が「大体においては古来相伝の旧訓に依拠せるものと見て大過なかるべく」「書紀の古訓が如何に貴重なるものなりや、あるいはまた以て之を概するに足るべきなり」と述べられている。

なお付け加えれば、「訓点語と訓点資料」誌の小林芳規氏「猿投神社蔵・正安本文選」（一三〇二年書字加點、本邦最古の文選写本）では、班孟堅「東都の賦」に「鳳蓋琴麗」を「キヌカサ シムレイト シナフテ」（同誌18集41へ）とよむ。鳳蓋は天子の車にかける日おおい。琴は ①木の枝や花が垂れるさま、又茂盛のさま、又おほひかぶさるさま ②木の枝葉のしげるさま、琴麗は段注に「枝条茂密之兒、借りて上覆の兒と為す。」とするを引く。

また張平子「西京の賦」には④「毛羽の襪纒シケンたるを被キ」を「毛羽のしなへる」⑤「長袖の颯纒サクセンたるを奮ふ」を「長き袖のしなへる」と読む（同上21集、34・38へ）。颯は「大字典」に衆盛のさま、纒は衆多のさま、連続のさま、長ささまとあり、颯纒は長ささま、又長袖のさまであり、ここは後宮の女官たちの宴に接待する姿で「朱履を盤樽にうごかし、長袖の颯纒たるをふるふ」と描いているから、袖の見事に長く垂れたさまを形容している。

襪纒は毛羽の衣のさま、「大字典」は「衣裳の毛羽の垂るるさま」とする。以上三語、いずれも、枝や花が地に垂れんばかりに茂り盛え咲き盛えているさまになぞらえて、絹かさ・長袖・毛羽の衣の、美しく見事に垂れているさまの形容である。「新潮国語辞典」がし

なう「撓う・嫋う」の項で、①弾力があってたわみ曲がる、といった在来の解説をくり返しながらも、その用例には最勝王経平安初期点の「垂下(しなへる)沙羅の枝」をあげているのは、当を得ている。

さらに、院政期に撰せられ古訓を集大成したと言われる類聚名義抄を見るに、シナフに当たる漢字として前掲の「颯纒」「颯」「蕤」のほか、「鬻・髟・閻敷・敷・順・精」をあげる。「鬻」はその訓に「サカユ・サカリニ——トサカリニ・シゲシ・シナフ」の訓があり、前述の意味に含まれる。「髟」は①髪が長く垂れさがるさま、大字典に「長髪タル・髪乱ル・垂下ノサマ」、文選「秋興の賦(潘安仁)にも「時歳のをはり尺くるを悟り、慨として首をたれてみづから省りみる。斑髮髟れて以てかんむりをうけ、素髮颯として以て領に垂る」(国訳漢文大成本、上451ペ)と見える。

「閻敷」の敷は假借して易と同じ。易はあるいは易の誤りかと愚考される。「易ヤウ」は大字典に「アガル・飛揚ス・長シ・衆キサマ」とあるが、「易」には「あなごる・改める・よろこぶ・てがるい」(諸橋)の意味しかない。「閻」は大字典に「好ク長シ・衣長シ」とあり、「閻易」は「衣の長いさま」、文選・司馬相如・「上林の賦」を引くが、宮中の美女の衣裳の形容である。即ち「青琴・宓妃の徒……独繭の褵袂(ユエイ・軽く長きさま)なるを曳き、眇閻易として以て郵削(ジュッサク、刻画して作ること)せるがごとく」(同大成本275ペ)とあり、元禄版「文選傍訓大全」には「眇ト閻易トユキメグリテ絵ガケルがゴトシ」とよみ、大成本の解釈はこれに従う。諸橋氏も「眇閻易ベウエンイ、行き具、回転するさま〔注〕銑曰、眇閻、行貌、易、廻転貌」を引くが、波多野太郎氏の示教によれば、眇も閻易も広やかなさま・フワットしたさまであり、重野・

服部の「漢和大辞典」が衣服の長大なるをいふ、としたのに近い。

この文は史記、司馬相如伝にもあっており、諸橋氏は「〔注〕集解曰、衣長皂」を引く。その他、諸説あるが、古人が「しなふ」と読んだのは、やはり長く垂れてみごとくな、の意に取ったのに違いない。

さて「順」と「精」とは、これを「しなふ」とよんだ実例を見ていないので、何とも言えない。ただ色葉字類抄がシナフと訓ずるものに「葳蕤・髟・閻易」と並んで「鬻順也」がある。もし、これが根拠あるものならば、単純に「シタガフ」の意味ではなからう。あるいは「大字典」が名乗として「ノブ」とする如きものか? 「精」は「字彙」に熟也とし、また清也潔也美也ともせられ、「会玉篇大全」には「凡そ物の純(もはら)至る者皆精といふ」とあり、「菁」にも通じて花咲くことを示す、特にそれが米へんであることに注意するとき、それは稲とおそらく関係あるものと思う。顕宗紀に「出雲者新墾・新墾之十握稲之穂。於三浅蕪・釀酒。美飲喫哉。」(岩波大系本「古代歌謡集」179ペ参照)とあり、「日本書紀通釈」(巻四2467ペ)に「シネはイネに同じ。和名抄に秬米(字亦作粳)和名宇流之禰(京大編の同書421ペ)、新猿楽記に熊米訓久末之禰。祝詞に和稲、荒稲などなほ多し。解云。十握稲とは稲穂の長きを云。その稲以て釀る酒と称へ給へりと云り。」と説く。ウルシネは和訓葉に「延喜式に獲ノ字を書たれば秋獲の多きをいふにや、黍・粟にいふも同じ」とあるように、和名抄「梁米一名芭粟一名稈米阿波乃字留之禰」(前掲425ペ)ともあるので、シネはイネ科の食用植物に拡大されて用いられる。また「秬ワセヨメ」(会玉篇大全)、秬禾は「大字典」にワセイネとあり、和名抄「糲米、精米所ニ以享神也、久万之禰」の注にも「久万之禰、奠稲之義、淡路国郷名有ニ神稲、訓ニ久

万之呂」とあるから、神や貴人に捧げられるような豊かに実のつた稲を指したのであろう。新潮国語辞典「うるう」の項は「地皆沃（うるひ）壤（こまやかに）」と最勝王経平安初期点にあることを教える。日数の多い聞う年なども考え合わせられ、ウルシネもそれらと無関係ではなからう。恐らくはイシイネ（美稲）で、母音の重なるのをきらってイが脱落したものと思う。それが熟語にのみ現われるのも、このためである。「いしき盃」（宇津保）が中田編「新撰古語辞典」にあげられている。この美事に熟した稲の穂が垂れているさまをシナフと言ったのであろう。このさまは、万葉卷二114に

「秋の田の穂向の寄れること寄りに君に寄りななこちたかりとも」また、卷十²²⁴⁷「秋の田の穂向きの依れる片よりにわれは物思ふ、つれなきものを」とよまれた片寄りである。この稲の穂の部分だけが一方に片寄り垂れることを、シナツ（四段活）と言って、一般的な茂密・成熟を示すシナフと区別したものらしい。この命令形に、いわゆる完了持続の助動詞「り」を付けたものが「しなてる」である。

推古紀、聖徳太子の歌（岩波大系本「古代歌謡集」195ペ）

しなてる片岡山に飯に飢てこ臥せるその旅人あはれ

万葉卷九1742の長歌

級照る片足羽川のさ丹塗りの大橋の上ゆ紅みの赤裳裾引き……

……ただ独りい渡らす児は若草の夫かあるらむ……

源氏物語早蕨卷（岩波大系本五26ペ、吉沢「新釈」卷五212ペ）

しなてるや鶏の水海に漕ぐ舟のまほならねどもあひ見し

ものを

以上の説明から「しなてる」が「片」や「丹穂」の枕詞になりうるということが分る。

万葉の、朱塗りの大橋を赤裳裾ひき渡る少女といい、早蕨の巻で「目も輝く心地する殿造りの、三つば四つばなるなかに」迎へられ、匂宮が「いみじう御心に入りてもてなし給ふなる」中君の話しと言ひ、いづれも目を喜ばせ耳を楽しませるはずの道具立てなのに、それに対する人の心はうらがなしい。一種の豊満のなかの哀愁をただよわせるのも、冬ま近いみのりの秋にふさわしい。書紀の「十二月庚午朔、皇太子遊行於片岡」の片岡も恐らく美しい光景だったろう。飢え行き倒れた旅人の姿は、それとよき対照を示したにちがいない。

風の神の「志那都比古神」（記伝神代部229ペ）紀の級長津彦命も「シナツ」の片寄り垂れる意味と関係があるう。和訓栞に「口訣に風飄云ニ級長」と見えたり。風飄は野分の風也といへり、又乾（いぬゐ）の風をいふと言へり」とする。三島らの「漢和大辞典」には「上より吹く風、ふきおろし ②大風」、「大字典」は「玉篇、風自上下、謂之風飄」を引用し、風が上から下へと一方的に吹くさまと見ている。

この神を註釈する箇所が説くように万葉の志長鳥（水長鳥とも）が丹穂鳥と同じとすれば、丹穂の穂首の傾き垂れるのと同じ形の鳥の首のさまに、その特色を見て命名したものかもしれない。そしてまた、類聚名義抄のシナゲルシナゲルの字に「呻・吟」「竜鐘たなこ」（「大字典」に反切して癡、①年よりて病み疲る ②志を失へる貌 ③涙をたるるさま ④竹の名とある）があるのを見れば、「シナガ」もその類縁の語で、老人の病弱に苦しみ首を垂れて行くさまの意であるとも思われる。志長鳥居名野へのかかり方は源氏、葵卷に「かの居並み倦くんじたりつるけしき」とある「居並み」を考えるより他はな

い。「安房」へのかかり方は、やはり呻吟の声とすべきである。
(後記 参照)

大日本国語辞典は「にほてる」の項で「一説、にほの海面の照り輝く義」(統雅言集覽)とするが、これも「しなつ」と同様な手続きで「にほふ」(映発)から派生させた歌語で、「部分的に月の光りを映発する」の意味ではないだろうか。つぎに歌を掲げておく。

続 後 撰 334 辛崎やにほてる沖に雲消えて 月の氷に秋風

ぞ吹く (後京極撰前太政大臣)

続 千 載 552 さざ波やにほてるあまのぬれ衣 浦風さむく

擣たぬ夜もなし (前大納言為氏)

秋篠月清集 2041 しがの海の汀ばかりは氷にて にほてる月を

寄する白波 (良経)

拾 玉 集 6112 粟津野の尾花よ 風に散りやらでにほてる露

は螢なりけり (慈鎮)

新後拾遺 386 月かげもにほてる浦の秋なれば しほ焼くあ

まの烟だになし (前大納言為家)

× × × ×

大分、脱線したが本論に立ち返ろう。その前に日本古典全集「伊呂波字類抄」にもシナフとして「影^{59ウ} 閻易^{71ウ} 襪^{シダラカナリ}」とある。シダラカナリは明きらかに「枝垂る」から派生した形容動詞である。

なお、以上のことから当然分かるように、「名義抄」では「撓」は「タム・メグル・ネヤス・ミダル・ウゴカス・タヲヤカナリ・ヲル」など、「嫋」も「タヲヤカナリ・タム・タホヤク・ウコカス・シメヤカナリ」、「揉」はタムの一訓のみで、「シナフ」とは読まれてい

ず、さらに「櫂^{カチ・ハマス}・サヲ」^{ユレ}「旌^{ユレ}・タム・ホトコス」^{ホトコス}などを見れば、舟の楫や竿や旗のゆれはシナフでなく「タワム」である。万葉総索引を見ても「沖つ浪トヲム」「なよ竹のトヲヨル」「秋萩の枝もトヲヲに」「枝垂る柳のトヲヲにも」があり、源氏物語でシナフ系は「シナヤカ」一語(後述を見よ)なのに、「タワム」系は圧倒的に優勢である。

さて、改めて契沖のさきの解釈をかえり見よう。契沖は「しなふはしだる心なり」と正解に近い答えを出しながらも、歌の解釈としては「木の葉もわが心を知りけるやうに打ちしたりて見ゆるとなり」として、結局「シナダレテイル」と解してしまった。これを批判しつつ山田孝雄「万葉集講義」(巻三、242ページ以下)は、特に2284・4441におけるシナフが男女の「姿の若々しく華やかにすらりとしたるさま」を示すと見、「若く水々しくて、弾力性ありて柔かにたわむ如き感じを主としていへる語」と規定、「この山には、真木の葉が勢盛んに若々しく、しなやかなる姿にて茂りあへるを見る。われわれは、この若々しくしなやかなる姿を見て、わが思ふ人の姿を連想し、忍びかねてここを通るが、この櫃の木の葉は、わが心をば知りたるならむ、さやうに思ひて見れば、ますます故郷に残れる人のしなやかなる姿が、この木の葉によりて思ひ出さるるよとなり」との解釈に到った。四段活の「しのぶ」(偃ぶ・賞美す)が、下二段活の「しのぶ」(忍ぶ)と混同せられている点も契沖と同じであるが、これを直すのみでなく、シナフシナヤカナ姿と解釈するのをやめ、さきに取り出しておいた「茂り榮える」の意味を当てたらどうなるだろうか。「真木の葉の茂り榮えている勢の山の美しい景色

を賞美することもなく、葉守りの神に(旅の安全を)祈りながら、私は足を早め山路を越えて行こうとする。この私が繁みを分けて行く気持ちは木の葉だって(きつと)分かってくれたことだろう。(勢の山は、妹山という愛人を始終そばにひかえて立っているのだから)。さいごの()の言葉は、妹背そろっていると見立てたのだが、背の山しかないのなら、(勢の山は山だから妹山がなくても平気かもしれぬ。しかし私は人間だから、勢の山という名前からだけでも愛妻のことを思い出さずにはいられない)となろう。とにかく、古人は

卷三 285 栲たけひれの掛けまく欲しき妹が名を この勢の山に懸け

ばいかにあらむ

卷一 35 これやこの大和にしては わが恋ふる紀路にありとふ

名に負ふ背の山

卷七 1208 妹に恋ひ わが越え行けば 背の山の妹に恋ひずてあ

るが羨あましさ

といった感懐を抱いてこの山を越えないわけにはいかなかった、それは当然の前提となる。してみれば、木々の繁りに、無理にシナヤカナ姿を見、そこから想いを故郷の妻のシナヤカナ姿に馳せるのは、あまりに理くつが合いすぎているのだ。

卷十 2284 率爾今毛欲見 秋芽子之 四槎二将有 妹之光儀乎

(①ゆくりなく岩波大系 ②いきなみに代匠記) 今も見がほし秋萩のしなひにあらむ 妹が姿を) ①の訓は類聚名義抄 ②の訓は古今六帖に依拠

代匠記(全集本、第三卷196べ)は「秋萩のしなひにあらんとは、萩が枝のたはやかなるによそへて言へり。しなやかと言ふに同じ。藤のしなひ、柳のしなひなど言ふ、これなり。日本紀には莫々然とかきてしなふと読み、文選は璀璨とも垂ともあるを読み。これら

は草木の上に言へり。颯シヤカサ纏チ、これは人の上に言へり。」として、人の上・草木の上を二分した所が注目せられる。

文選「西都の賦」(大成本14べ)には「紅羅颯纏として、綺組(アヤ絹ノ領布状ノ紐)續紛たり」ともあるが、颯纏は前に述べたように長く垂れるの意味で、これも「紅くれないの絹のうすものが美事に長く垂れ、綾絹あやぎぬの領布ひれが入り乱れる」とすべきである。大系本は「美人袖をかざして紛然として来往し」とするが、紅羅は長袖ではない。もちろん、貴婦人そのものをさすでもないのだから、人の場合だけ「シナヤカナリ」と解釈する契沖の二分法は成り立たない。

万葉のこの歌は、秋萩のこまやかに茂っているさまを、しなひとし、花の盛りから娘ざかりの少女の姿へと連想を運んでいるのである。

卷一二 2863

誰葉野爾 立志奈比垂 菅根 惻隱 誰故 吾不恋
(神古) 本歌(神さぶる) (誰葉野に立ちしなひたたる菅の根の惻隱たれ故 わが恋なくに)

代匠記は「しなふ勢の山などよめるに同じ、しなやかに立てるなり」(第三卷452べ)とあっさり終わる。もともと「立神古菅」と続けて、「立つ神小菅」と読んでいるのだ。岩波大系本は「しなひ立っている」と注するが、この語自身現代語として熟さぬ事はさて置いても、菅が山菅(和名抄はヤブ蘭とする)だとすれば、蘭のどこがしなひっているのだろう。葉のそりぐあいあが垂れているというのなら分かるが、竹などのしなひとは大分遠くなるのではなからうか。また、これを「若々しく柔軟な美しさ」とすると、本歌の「立ち神さぶる」とは全く逆の歌が生まれていることになる。もしこの「立ちしなふ」を「立ち榮え茂っている」と解すればどうか。

「ねもころに」が岩波本の注にいう「根も凝ろに」(Ⅲ 465べ)で、「根が一つに凝り固まろうとするかに見えるありさま」とも考えられ、要は根の発育のよいきまとすれば、「立ち栄え茂っている」という解釈はごく自然にこれと結ばれる。また、本歌の「立ち神さぶる」物さびた味わいとも全く矛盾しない。古人が菅からうけたのであろう情緒は、なんの抵抗もなく我々のものである。

卷十三 3234 は長歌だが、全文を紹介しよう。

八隅知之 和期大皇 高照 日之皇子之 聞食 御食都国 神
風之 伊勢乃国者 国見者之毛 山見者 高貴之 河見者 左
夜気久清之 水門成 海毛広之 見渡嶋名高之 己許乎志毛
間細美香母 挂卷毛 文爾恐 山辺乃 五十師乃原爾 内日刺
大宮都可倍 朝日奈須 目細毛 暮日奈須 浦細毛 春山之
四名比盛而 秋山之 色名付思吉 百磯城之 大宮人者 天地
与 日月共 万代爾母我

やすみしし わご大君

高照らす 日のみ子の

聞し食す み食つ国

神風の伊勢の国は 国見ればしも

山見れば 高く貴し

川見れば さやけく清し

港なす海もゆたけし

見渡しの島も名高し

此所をしも まぐはしみかも

掛けまくも あやにかしこき

山辺の 五十師の原に

うち日さす 大宮仕へ

朝日なす まぐはしも

夕日なす うらぐはしも

春山のしなひ栄えて

秋山の色なつかしき

もしきの 大宮人は

天地と 日月と共に 万代にもが

問題は「春山のしなひ栄えて……」以下の句であるが、土屋文明「私注」は「春の山の如く茂り栄え、秋山の如く色の親しまれる大宮の人々は、天地と共に、日月と共に、萬代にもあってほしい」とあり、おそらくこれ以外に「しなふ」の取りようはなからう。岩波大系本も「繁り栄え」とするが、依然「しなやかな曲線美をなすこと」と注するのを忘れていない。もっとも、こうした解釈は宣長の説をうけた「万葉集略解」がすでに先鞭をつけている所で、宣長は「しなふ」をシナヤカと解釈しようために、この歌の大宮仕へや大宮人をすべて女性であることを強調し、この歌の制作時をも持統天皇行幸と結びねば気がすまなかったのである。

「シナヤカナリ」説が不可で「繁り栄え」説が可なることは、春と秋とを並べて歌ったつぎの対句の諸例からも知られる。

卷十九 4187 春花の繁き盛りに

秋の葉の黄色時に

あり通ひつつ見つつ しのはめ

この布勢の海を

卷十三 3266

春去れば花咲きををり

秋付けば丹の穂に黄色もみぢ

額田王の春秋の優劣を判ずる歌でも

卷一 16

冬ごもり春さり来れば

鳴かざりし鳥も来鳴きぬ

咲かざりし花も咲けれど

山を茂み 入りても取らず

草深み 取りても見ず

秋山の 木の葉を見ては

もみぢをば 取りてぞしのふ

青きをば おきてぞ嘆く

そこしうらめし 秋山吾は

とあって、春と「繁き盛り」とは必ず密に結ばれているのだから。

ちなみに、「そこし恨めし」のそこを「青きをば置きてぞ嘆く」

の点のみにありと見るのが定説のようだけれども、類聚名義抄には

望ネガフ、ウラム、ホシキ(法中24)

嫉ウラヤム、ウラム(仏中13)

の訓が見られる。すれば、「望」から派生したウラメシ、「嫉」か

ら派生したウラメシがありえたはずで、「そこ」の解釈はやはり自

然の感情の流れに従って「もみぢをば取りてぞしのふ」以下全部と

すべく、(山に入り直接もみぢを手にし得る喜びに秋のよさを見、

そこが羨ましいところだ、そこが秋の望ましいところだ)の意に取

るべきかと思う。現代語の「そこがニクイ所だ」といった解釈が許

さるべきではなからうか。

契沖も先の歌に対しては、「春山のしなひさかえて、とは、葉の

もえ出、花のさけるによせて言へり」(代匠記、Ⅲ 608 べ)とし、

「もししきの大宮人」へのかかり方について「これは大神宮の奉幣

使の容儀あるが、礼敬をいたすを見てよめるなるべし。但し上に

『いそしの原にうち日さす大宮つかへ』と言ひたれば、鳳闕に比し

て、齋宮をはじめて、神官の仕へたてまつるをいふにや」とするの

を見れば、「しなふ」に大宮人の威儀を正した精彩あるさま、を感

じ取っていたのではないかと思われる。上述「莫々」に「清静至

敬のさま」の意ありとされていることを想い起こすのである。

さいごに卷二〇441に移るが、これには題詞がある。

上総国の朝集使、大掾大原真人今城の、京に向ひし時に、郡司

が妻女らの餞(うまのはなむけ)する歌二首

立ちしなふ君が姿を忘れずは世の限りにや恋ひ渡りなむ

「新潮国語辞典」にこの歌を例にあげて、「しなふ 色 っぽいふ

りをする」と説くが、この君はいやしくも朝集使である。地方庁

一年間の政治の実績をしらべあげ、中央政府に申送する監督官であ

る。そしてこの歌は、検察されるが、わの郡司の妻等がその検察官に

たてまつった歌である。百歩ゆずって、検察官の方がコッソリ陰で

色目を使っていたと仮定した所で、すくなくも公の席でのなむけ

の歌である。「色 っぽいふりをしておいでのあなた様」などは、

どう考えても言えた義理ではあるまい。これを文語調で「しなな

となまめく」「しなやかに立つ」と言い変えてみても五十歩百歩で

ある。第一「しなやかに立つ」という言い方そのものが現代語とし

て熟しているとは言いがたいだろう。

ここはやはり上述の「春山のしなひ盛えて秋山の色なつかしき」

大宮人を参照すべき所ではなからうか。今を盛りの貴人にふさわし

い威儀を正して、しかもつつしみ深くもの静かな清らかな感じ、

とでも言うべきではないか。「みのる程頭のさがる稲穂かな」は、卑俗ながらこの間の事情を言い得ている。「清静至敬」の態度に見られる気品を、ここでは賞めたたえたと見るのは、ひが目だろうか。煙りが立ちのぼる、霧立ち渡る、の語に見るように、上昇・進出の意を示す接頭辞「立ち」を伴なう「しなふ」は、「今からのち、ますます繁栄の道を歩いておいでになろうとするあなたさまの……」が本来の意味で、それに「物静かですつましい」ニュアンスを加えれば足りようか。神籙は豊年の報告であり、予祝でもある。

以上で万葉における仮名書きの「しなふ」、即ち「しなふ」と読まれる確実な例、を終わる。卷十一 2752 の「吾妹児を聞きつが野辺の鹽合歛木（なびきねぶ）吾はしのび得ず間なく念へば」、卷九 1738 の「人皆の斯く迷へれば、容艶（かほよきに）よりてぞ妹はたはれて有ける」卷二 158 の「山吹の立儀足（たちよそひたる）山清水酌みに行かめど道の知らなく」の三首は、宣長にいたって「シナヒネブ・ウチシナヒ・立チシナヒタル」と読むにいたるが、この事は宣長が契沖以上に「しなふ」の意味を女性化したことと無関係ではなからう。ただ宣長が「しなひ」撓ふ・シナヤカナリ」説を取りながらも、いやその故にであったが、「秋萩のしなひにあらむ」の「に」は変で、「て」の誤りではないかという誤字説を出している辺りは、やはり宣長の眼の鋭さを感じさせる。万葉の実例を見るに「動詞プラスあり」の場合、すべて「……てあり」であった。ここが唯一の例外を成す。シナヒを名詞「盛り」と取れば別であるが。さて「しなふ」はその後どのように変化して、現代語の「しなふ」に到っているかとなると、まだよく分からない。こういう、現代語と同じように解されるため、ほとんど問題視されない単語の歴

史ほど、分からぬものはない。とにかくくだれるだけくだってみることにする。それも契沖の示教に従ってではあるが。

伊勢物語（101段、岩波大系本171べ）に

昔……在原の行平……左中弁藤原の良近といふをなむ、まらうどぎねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その花のなかに、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。

とあり、校注者は「垂れている花房」と注する。

勢語臆断（契沖全集、卷六 364べ）は、その「しなひ」が真名本に「蕤」（花の盛んに垂れさがれるさま、盛んなさま）となっていることを注記し、文選の「藤垂ヒテ島陟リ易シ」枕の「木の花は云々藤の花のしなひ長く、色よく咲きたる、いとめでたし」、万葉の「秋萩のしなひ」催馬楽の「青柳がしなひを見れば今さかりなりや」などの平安期以前の用例を親切にあげる。行平はこの藤を題として、正客の属する藤原氏の盛えをたたえる歌を作るのだが、そうした主題から考えて、この「しなふ」も「見ごとに咲き盛る」と考えるべきだろう。

催馬楽は、岩波大系本「古代歌謡集」389べの「大路」と題するもの。

大路（おほほぢ）に沿ひてのぼれる青柳が花や、青柳が花や、

青柳がしなひを見れば、今さかりなりや今さかりなりや

同書注には「しなひ」を「柔らかに風になびくこと」としているが、あとに「花が盛り」というのであるから、「柳の葉の美しいさま」をではなく、柳絮を花と見立てたのであり、「しなひ」はもちろん、柳絮の盛んに芽吹くさまと解せられる。だからこそ、この歌は

春専用の歌とされるのである(同書、注を参照)。万葉に「青柳、梅との花を折りかざし、飲みてののちは散りぬともよし」(五卷821)「うちなびく君の柳とわが宿の梅の花とを如何にか分かむ」(同826)などと詠まれた青柳であり、梅と共に早春の風物として賞美せられたのである。

こう見てくると、名義抄・色葉字類抄の「しなふ」について既述したように、平安期以前の「しなふ」を「撓ふ」または「嫋ふ」と解すべきものは見当たらずに、証せられる。

源氏物語には「しなふ」なく、形容動詞「しなやかなる」の一例のみが見られる(タワムの例が多い)。「夢の浮橋」の巻(岩波大系本V428p)、薰大将の使者として小野の尼庵へつかわされた浮舟の腹ちがいの弟、小君の登場する場面である。

あやしけれど「これこそは、さは、たしかなる御消息ならめ」とて「こなたに」と言はせられたれば、いと清げにしなやかなる童の、えならず装束きたるぞ歩みきたる。わらふだ、さしいでたれば、簾のもとについで、「かやうにては、さぶらふまじくこそは、僧都はのたまひしか」(御簾ノ外ニオカレルヨウナ他人行儀ノオアシラヒヲ受ケルハズハナイヨウニ、僧都ハオツシャイマシタ——吉沢義則訳による)と言へば……(色々あつて結局)……皆、言ひ合わせて母屋のきはに、几帳立てて入れたり。

この「いと清げに、しなやかなる童」を、山岸氏は「たいそうきれいであり、落ちついてしとやかな童」と訳されるが、文脈から察すれば、前記の「清静至敬のさま」に通ずるものであって、「物静かですつましやかな態度のうちに、威儀を正した所のある姿」を言

うのである。「色ッポサ」などは、およそ縁がない話しなのだ。むしろ、ここでは小君の毅然たる態度こそきわだっている。

ただ、この「しなふ」の史的変化を考えるに、現代語の「この着物は肌によしなう」(もつともこれも現在では広島、愛媛などの方言化しているが)の意が全く無いかと言えはそうでもなく、絹のうすものなどの見事に垂れた姿はそれに通じ、柳のしなひはシナダレル柳に転じて行く可能性をまで否定するわけには行かない、ただそれには「時の経過」を必要とするのである。その意味で、平家物語、橋合戦の「水にしなうてわたせやわたせ」(岩波大系本、上313p)は注者の言うように「順応する」の意を持つ、が、それは現代標準語の「竹が雪にしなう」の意味には距離がある。日仏辞典(1603年の日ポ辞書の仏訳)で「しなう」①風のために植物などが身を屈すること、転じて②ある人に身をゆだね、また屈すること、服従すること」とあり、前例は①にやや近いと言えようか。また、山田孝雄氏「平家物語の語法」(671p)には、延慶本の「頼朝ハ六ヶ国コソ打シナへ候へ」を引き、(従ハシムル義か)と注している。これは使役態で下二段になっているが、前掲の②の意味に等しい。

室町末の黒本本節用集には①採②擻③颯纒をシナウと読む。①は名義抄「タム(矯)」で「大字典」には「直なるものを曲げ、曲がれるものを直くす」とあるから「タワメル」意の他動詞である。②は恐らく「きぬたで固い衣をやわらげることであるから、現代語の「シナヤカニスル」に当たる。これも他動詞である。天文ごろの運歩色葉集には「影楯」(シナヒダテ)が見え、天正本節用集には「順弦」(ジナイヅル)がある。前者は、あるいは当時、竹を束ねて作った楯かと思われるが不明、後者は「大日本国語辞典」に

「シナヘヅル」とも読み、新しい弓にシナイ(撓)を付けるために張る弦、とする。これは、ようやく現在の竹のシナイ(力が加われば屈し、力がなくなればもとに戻る)の意に近いかと思われる。文例がないので確実には言えないけれども、「腫れものにさはる柳の(柳のさはるトモ)しなへかな」(芭蕉)にしても、「風の力に従順な」の意に近く、これを「ナビク」とよぶ現代人の感覚にはピッタリ来ないところがあるように思う。以上を要するに、平家の「しなふ」が従順を核とするに對し、現代語の「しなう」は抵抗に重きを置くのであって、その意味での使用は室町末に芽ばえるように思われるのである。

(一九六七・二・二二)

(後記) 新撰字鏡・類聚名義抄などに「ウ」と訓まれる鳥の名を諸橋「漢和大辞典」(字訓索引)に検するに、つぎのことが分かる。

- 1 「鷓」ロウ。しまつどり。「段注」今江蘇人謂之水老鴉、畜以捕魚、鷓者、謂其色黑也。

- 2 「鷓鷯」ロシウ。しまつどり。「北史、倭伝」倭人以小環掛鷓鷯

項、令入水捕魚、日得百余頭以充食。

- 3 「鷓」シウ。しまつどり。「伝」鷓、秃鷓也。「本草、鷓鷯」集解、

時珍曰、秃鷓、水鳥之大者也、出南方、在大湖泊处、其状如鶴而大、青蒼色、張翼、広五六尺、拳頸高六七尺、長頸赤目、頭項皆無毛、其頂皮方二寸許、紅色、如鶴頂、其喙深黄色而扁直、長尺余、其喙下亦有胡袋如鷓鷯状、其足爪如鷓、黑色、性極貪惡。

- 4 「鷓」コ鷓鷯は、がらんでう。「集韻」鷓、鷓鷯、鳥名、好群飛、沈水食魚。「莊子、外物」魚不畏網、而畏鷓鷯。

- 5 「鷓」がらんでう。伽藍鳥。ペリカン。洵河。鷓鷯。鷓に同じ。

- 6 「鷓鷯」ティコ鳥の名。がらんでう。ペリカン。単に鷓ともいふ。

「魏志、文帝紀」夏五月 有鷓鷯鳥、集靈芝池。

- 7 「鷓」シウ。「爾雅翼」鷓、水鳥、色深黑、鉤喙、善没水中逐魚、又名鷓鷯、老則頭翼漸白。「本草、鷓鷯」集解。時珍曰、如鷓而長喙微曲、善没水取魚、日集三州渚、夜巢林木、久則糞毒多、令木枯也。南方漁舟、往往縻畜數十、令其捕魚。

- 8 「類」トク鷓鷯は、う、しまつどり。「本草、類鷓」積名、扶老、鷓鷯、時珍曰、凡鳥至秋毛脫秃、鷓頭(鷓、或作鷓)秃如秋毯、又如老人頭童及扶杖之状、故得其名。

- 9 「鷓」ラウウ。しまつどり。

以上、ながながと引用したのは、中国人によって、鷓が杖をついた老人と見立てられ、また群れを成して集まるものと見られていたことを証するにある。「北史」の作者李延寿は、貞観(唐太宗の年代627~649)中、官は御史台主簿だった人ゆえ、そのころ日本で鷓鷯をしていたことが遠く中国に聞こえていたことも分かる。(中国ではペリカンと混同したこともあったらしいが、それは今、問題ではない。)

万葉卷七1189「大海にあらしな吹きそ四長鳥居名之湖に舟泊つるまで」の猪名川は名物アユで知られ(岩波新書「アユの話」114頁)、ウの並べかたには、古参優先のきびしい序列があること(同上128頁)を考えると、シナガ鳥は鷓飼のウ(万葉III 279歌参照)であり、猪名に「居並」がかけられていると見て、ほぼまちがないと思う。

ニホドリは類聚名義抄に鷓とあり、息長川の枕詞にふさわしい鳥なのだから、やはりカイツブリと見る。記の38「いざ吾君振態が痛手負はずは、にほ鳥の近江の海に潜きせな吾」の歌、その後、その死体が遠く離れた所で発見されたなどの説話の文脈に照らせば、まさにカイツブリの姿と言うべきであろう。(六七・三・一五)